行動計量学会報

日本行動計量学会第39回大会のご報告

第39回大会実行委員長　森　裕一

9 月 11 日～14 日，岡山理科大学（11 日は岡山大学）において，第 39 回大会を開催させていただきました。参加者は 324 名（うち学生登録 43 名，チュートリアルセミナーのみ 31 名）で，スタッフを含めると 353 名がかかわる大会でした。特別セッション 14 テーマ 19 コマ，一般セッション 7 テーマ 14 コマ，発表総数 144 件（うちキャンセル 5 件），1 日に 6 並行セッションを設ける大変活発な大会となりました。岡山の地での大会開催は 4 回目ですが，行動計量学に関する議論が再び岡山で行われたことを大変光栄に思います。

チュートリアルセミナー（11 日）は，日本テスト学会と共催としました。第 9 回大会が直前に岡山大学で開かれるからです。最新で両学会に共通する話題として，「シンボリックデータ解析」と「学習評価理論の新潮流」の 2 つを設けました。テスト学会の一般セッションと並行でしたが，参加者約 40／60 名と内容の濃いセミナーとなりました。

特別企画の 1 つ，「特別見学会」では，本学関係の話題として，全国放送でもしばしば紹介されている真水を使って海水魚を育てる養殖施設「生命動物教育センター」をご案内しました。海を知らないトラフグ，クエ，シマアジ，そしてマグロ 4 匹に会って（？）いただきました。2 つ目の「特別講演」では，地元の話題として，県北の産業遺産への取り組みを紹介いただき，歴史や技術革新の手法に触れる向学のひとときを過ごしました。

3 つ目は，会報 129 号の巻頭言に飽戸理事長が書かれた「東日本大震災に対して本学会に何ができるか」という問いかけに対して，理事長自らが企画された「特別企画シンポジウム『災害報道と行動計量学』」です。災害研究，テレビ，ソーシャルメデイア，報道ストレスにかかわる 4 名の専門家に，それぞれの立場・データを基に報告をいただき，パネルディスカッションを行いました。実は，その飽戸理事長が急にお身体を悪くされ，大会参加ができなくなりました。司会・総括をされる予定であっただけに，大変残念でした。急遽，災害研究の第一人者で，本会名誉会員である木下冨雄先生にピンチヒッターをお願いし，会を取りまとめていただきました。このシンポジウムは市民講座としても開催し，在岡の報道機関にも案内を出しましたので，一般市民と報道関係の方約 40 名の参加もあり，地元誌 2 社の取材も受けました（翌日の朝刊に掲載）。どう災害に向き合うかについて議論されたことは，周辺分野においても大変示唆に富む内容で，参加者 120 名が熱心に考える有意義なシンポジウムとなりました。

参加者のみなさんに快適にお過ごしいただけたか，懇親会での岡山の夜景も含めて，岡山の街も十分に楽しんでいただけたか，とても不安ではありますが，学際的・横断的な研究発表の場として，その責務は果たせたのではないかと思っています。これも一重に，参加者のみなさん，協賛企業各社様，実行委員のみなさん（実力者ぞろいで，実に気楽に実行委員長をさせてもらいました。学生たちも期待以上の働きをしてくれました）のお陰と，この場を借りてお礼を述べたいと思います。

岡山では，「岡山地域部会」が継続しており，行動計量シンポジウムも予定されています。どうぞ，機会をみて，また岡山にお越しください。

すべての方に感謝し，報告とさせていただきます。ありがとうございました。

（もり　ゆういち，岡山理科大学）

日本行動計量学会
2011 年度学会賞受賞者について

学会賞選考委員長　村上　隆

1. 学会賞受賞者の選考について

今年度の学会賞とその受賞者について，ご報告したい。最初に述べておかなければならないことは，今年度から受賞者選考の方法が変わったこと，また，新たに出版賞が設けられたことである。新たな選考方法は，各賞（功績賞，優秀賞，奨励賞，出版賞）について，候補を選出するワーキンググループを設置，そこで複数の候補が理由を付してリストアップし，それにもとづいて，選考委員会が審議して最終候補者を選考するというものである。この方式の確立には，今泉忠学会賞担当理事の多大な努力があったことを付言したい。

選考経過については申し合わせに基づき非公開となるが，以下に，ワーキンググループからの提言をもとに，各受賞者の受賞理由について簡単に説明する。

2. 功績賞

功績賞受賞者は，吉野諒三会員（統計数理研究所教授，本学会理事）である。吉野会員は，日本行動計量学会理事（1994年－），欧文誌編集委員（1991年－2003年，2000年－2003年副編集長）及び和文誌編集委員長（2003年－2005年）及び事務局長（2006年－2009年）として，本学会の運営全般にわたって貢献してこられた。

また，「行動計量学」，「*Behaviormetrika*」などに多数の論文を掲載されるなど，研究業績の面でもきわめて優れた成果を上げてこられた。さらに，本学会が日本社会学会，日本教育社会学会とともに協力して立ち上げた事業である，社会調査協会による社会調査士資格に関しても大きな貢献をされている。

吉野会員の研究テーマは，「国民性の国際比較調査」,「データの科学」,「文化多様体解析(CULMAN)」であり，主要著書に「心を測る」（2001年，朝倉書店），「数理心理学」（共著，2007年，培風館），「国際比較データの解析」（共著，2010年，朝倉書店）がある。

3. 優秀賞

優秀賞受賞者は Heungsun Hwang 会員（McGill 大学 Associate Professor）である。Hwang 会員の研究領域は，Generalized structured component analysis; cluster analysis; functional data analysis; nonlinear multivariate data analysis; brain imaging data analysis と多岐に及び，いずれも質の高い成果を上げておられる。

本学会関係では，*Behaviormetrika* 誌に，2005 年以降，5 編の論文が刊行されている。

Hwang, H., Dillon, W. R., & Takane, Y. (2010). Fuzzy cluster multiple correspondence analysis. *Behaviormetrika*, 37, 111-133.

Hwang, H., & Takane, Y. (2010). Nonlinear generalized structured component analysis. *Behaviormetrika*, 37, 1-14.

Hwang, H., Takane, Y., & Malhotra, N. K. (2007). Multilevel generalized structured component analysis. *Behaviormetrika*, 34, 95-109.

Hwang, H., & Takane, Y. (2005). An extended multivariate random-effects growth curve model. *Behaviormetrika*, 32, 155-163.

Hwang, H., & Takane, Y. (2005). Estimation of growth curve models with structured error covariances by generalized estimation equations. *Behaviormetrika*, 32, 141-153.

4. 奨励賞

次の 2 会員を受賞者とした。

1) 宇佐美 慧 会員（日本学術振興会特別研究員（DC2））

以下の 3 編の論文を *Behaviormetrika* 誌，行動計量学誌に刊行し，その他，心理学研究での論文や日本計算機統計学会などで幅広く活躍，今後が期待される研究を行っている。

Usami, S. (2010) IIndividual differences multidimensional Bradley-Terry model using reversible jump Markov chain Monte Carlo algorithm, *Behaviormetrik*a, 37, 135-155.

Usami, S. (2011) Statistical Power of Experimental Research with Hierarchical data. *Behaviormetrika*, 38, 63-84.

宇佐美 慧 (2011) 小論文評価データの統計解析 —— 制限字数を考慮した測定論的課題の検討 ——，行動計量学，38, 33-50

2) 宮崎 慧 会員（日本学術振興会特別研究員（PD））

行動計量学での以下論文に加えて，*Psychometrika* 誌にも 2 編の論文を刊行，国際学会・国内学会で積極的に発表し，今後が期待される研究を行っている。

宮崎慧，田村玄，繁桝算男 (2007) ベイズ推定法による 2 段階潜在クラス分析　行動計量学, 34, 21-31.

5. 出版賞

受賞の対象となった刊行物は以下の 2 編であり，受賞者は合計 4 名である。

1) 星野崇宏会員（名古屋大学准教授）

受章対象出版物は，

星野崇宏（2009）調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合，　岩波書店

である。調査等で得られたデータから正しく結論を導き出すために，データの偏りや選択バイアスを考慮してデータを処理する必要があるが，本書は，その補正および正しい推論を行なうための方法論を，共変量情報や欠測データモデルおよびデータ融合などを積極的に利用して提唱している。実証志向＝調査研究が盛んとなってきている行動計量分野において，非常に示唆的で実用的な解説書といえる。具体的には，「共変量情報を利用するための傾向スコア」，「欠測データモデル」，「セミパラメトリック推定」についての，我が国のデータによる豊富な実例とともに，筆者自身の研究成果を含む詳細な解説がなされている。

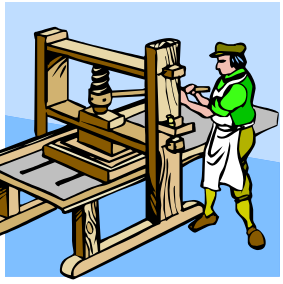
2) 柳井 晴夫 会員（大学入試センター名誉教授），高根 芳雄 会員（McGill University, Professor），竹内　啓先生（非会員，東京大学名誉教授）

受章対象出版物は，

Yanai, H., Takeuchi, K., & Takane, Y. (2011). *Projection matrices, generalized inverse matrices, and singular value decomposition*. New York: Springer.

である。

行動計量学で用いられる手法には様々な計量的手法があるが，本書は，その基本となるものでありながら，一般の線形代数のテキスト等には十分な記述のない，射影行列，一般化逆行列，特異値分解などについて永年の研究を踏まえて詳細に述べるとともに，さらに，新たなる内容をも含むもので，行動計量学おいて計量的方法に関係する研究者の必読書であると言える名著である。



学会賞受賞者より

「親孝行」と「恩返し」──功績賞をいただいて

統計数理研究所　調査科学研究センター
吉野諒三

統計数理研究所の「日本人の国民性」調査には，「次の４つの中から２つ，あなたが大切と思うものを選びなさい」という質問がある。選択肢は，「a.親孝行, b.恩返し, c.個人の権利，d.個人の自由」である。その後，国際比較調査で，翻訳・再翻訳のプロセスを得て，a と b は「a.親孝行，親に対する愛情と尊敬, b.助けてくれた人に感謝し, 必要があれば援助する」という表現で用いられている。表面上，東洋的価値観 a,b と欧米的価値観 c,d の対照になっている。

アジアではａとｂのペアが過半数である国がほとんどであり，これは不思議ではあるまい。しかし，欧米でもｃとｄのペアが過半数となる国はなく，多くともドイツ 37%，オランダ 28%，フランス 27% といったところである。単独の項目では，洋の東西を問わず, どの国も a.が最も多い（*Behaviormetrika*, 36, 2, p.139）。

この 20 年ほどの複雑な国際関係の中で，「民主主義」の拡大が謳われた時期があったが，個人の権利と自由は現代社会で重要であることは間違いないものの，人類の永い歴史から見れば，親子の絆，家族の大切さという普遍的価値観に比べ，この二，三百年ほどの欧米流「近代化」の中に生まれた価値観にすぎない。

さて，こうやって私が研究をしていられるのも，印東太郎先生，林知己夫先生，カナダの高根芳雄先生，アメリカの W.H. Batchelder 先生，L.Narens 先生の御蔭である。若い頃，大きな挫折をした私をその大先生たちへ繋いでくれた丸山久美子先生，研究者として見守ってくださってきた柳井晴夫先生，繁桝算男先生，岡太彬訓先生，村上征勝先生，行動計量の大先輩たちの恩も忘れてはいない。また，両親が年老いても兄とともに健康で働いていてくれたので，私は勝手に，好きな学問を続けてくることができた。

しかしながら,「親孝行, したいときには親はなし」となり，林，印東という大先生もすでに逝き，他の先輩たちにも何の恩返しもできていないままの自分の心に忸怩たるものがよぎる。

大先生，大先輩には直接には恩返しはできなかったが，それらの方への恩に対して，今度は私が後輩たちに何某かなすことが，せめてもの役割なのであろう。そうして，行動計量学が新たな発展する一助になるべく，尽力して行きましょう。

師の君の古希を寿き　静穏を学ぶが如く　月影青し

林知己夫賞（優秀賞）を受賞して

McGill 大学　Heungsun Hwang

First and foremost, I would like to express my sincerest gratitude to the Behaviormetric Society of Japan for this award. I am humbly honoured to receive the award from a Society which is internationally renowned and recognized for its promotion and support of work in Quantitative Psychology. I would also like to thank the former and current editors of *Behaviormetrika* for their encouragements and suggestions towards improving the quality of my work. Lastly, I am deeply indebted to my life-long mentor Professor Yoshio Takane for having always inspired me professionally and personally.

I obtained my PhD in Quantitative Psychology at McGill in 2001 under the supervision of Professor Yoshio Takane. From 2001 to 2003, I worked as a Research Analyst for an international marketing consulting firm

based in Michigan, USA. In 2003, I was able to take on an academic position as an Assistant Professor of Marketing at HEC Montreal, the affiliated business school of the University of Montreal. Subsequently, I joined the Department of Psychology at McGill University in 2006. Over the past decade or so, my research has been centered on the development and application of quantitative methods and computational modeling approaches to a wide variety of issues and topics in Psychology and other fields of inquiry. My specific research interests include theoretical and empirical developments in generalized structured component analysis, ways of capturing cluster-level heterogeneity inherent to various types of data, growth curve modeling for the analysis of repeated measures data, regularized data analysis, constrained statistical methods, and functional data analysis. I will continue to follow these exciting trajectories of research.

In addition, I have been concerned with rendering my quantitative knowledge more fully integrated with the needs of the substantive research community. In particular, due to rapid advances in technology, a broad cadre of substantive researchers has increasingly been encountering a variety of novel and challenging types of data collected through emerging and rather unconventional ways, which include eye-tracking data, motion-detection data, and functional neuro-imaging data, as well as clinical data of the longitudinal variety. I am strongly motivated to develop effective methods for the analysis of such data.

Quantitative Psychology is an exciting field that involves the generation and use of a wide array of quantitative and statistical methods which are destined to provide insights into behavioural, biological and psychological processes. Although the name of this field is rather narrowly defined, Quantitative Psychology can effectively address research across a wide range of disciplines, including Psychology, Neuroscience, Linguistics, Management, Health Sciences, Decision Science, and many others. Moreover, Quantitative Psychology has become ever more central as Psychology has matured as a science. In fact, all areas of Psychology are experiencing a rapid growth in mathematical modeling and an ever-increasing reliance on advanced statistical methods. I am proud and pleased to have contributed to advances in Quantitative Psychology; and because of this amazing recognition by the Society, I am ever more strongly encouraged to pursue my research activities.

肥田野直・水野欽司賞(奨励賞)を受賞して

日本学術振興会特別研究員（DC2） 宇佐美慧

この度は日本行動計量学会奨励賞という栄えある賞を賜りましたことを，大変光栄に感じております。日ごろからご指導いただいております，東京大学大学院教育学研究科教授の南風原朝和先生，また今回の受賞にあたり温かい評価をしていただきました諸先生方に深く御礼申し上げます。

統計科学の複合領域的な性格からすれば，統計学に興味を持つきっかけは研究者によって実に様々であることは想像に難くありません。私の場合は，元々は理系だったのですが，半ば興味本位で心理学を専攻しようと教育学部に入ったものの，熱心に打ち込めるものが見つからず，何か自分でもやれるものはないかと，学部三年生の頃に街中の本屋を散策していた際に偶然見つけた項目反応理論の本が最初のきっかけでした。このように，比較的に希薄な動機づけによって私と統計学との縁が結ばれたのですが，その後，項目反応理論を中心とした心理尺度構成のための方法論，および小論文試験に代表される論文体テストの解析に関する教育測定の問題を通して心理統計(psychometrics)に興味を持つようになりました。その当時から，心理統計分野の先生方の多く

がご活躍されている行動計量学会は，私にとっては近くて遠い，憧れのような存在でしたが，学会誌の頁を捲る度，統計科学の網羅する応用範囲の広さに驚嘆するとともに，論文内で展開されている問題意識の深さと，頻繁に顔を出す数式に面食らい，大学の図書館で一人嘆いたことを思い出します。

このように，畏れ多くも常に意識していた学会が行動計量学会でしたので，入会した初めての学会も，また学会発表を初めて経験した学会も行動計量学会でした。以来，毎年欠かさず大会には参加させていただいており，尊敬する多くの先輩・先生方とお知り合いになることができ，私がこれから研究の歩を進めていく上では行動計量学会は欠かすことのできない財産になりました。

そして，今回の受賞にはまた特別な思いを抱いておりますが，その理由は本奨励賞の正式名称「肥田野直・水野欽司賞」にあります。修士一年生の時に，主に統計解析部分のサポートをする立場として，心理検査開発の為の研究会に参加させていただいておりましたが，その時に肥田野先生に初めてお目にかかりました。肥田野先生は現在 91 歳というご高齢ですが，いつもしっかりした足取りで研究会に足を運ばれ，研究会中でも鋭いご指摘をしていただいております。その研究熱心なお姿を拝見するために，先生こそまさに研究者であると尊敬の念を抱かざるをえません。それでいて，いつも笑顔を絶やさずメンバーに優しくお声をかけてくださる先生は人格者でもあり，私の最も尊敬する先生の一人です。

そして，前述のとおり，行動計量学はその網羅する研究領域の広さが最大の魅力であると思いますが，一方で，異分野で活躍する統計学者間の交流は極めて乏しいという指摘が，国内外問わずあるのも事実です。林知己夫先生は，様々な分野の研究者が現実のデータ解析場面で抱えている問題を共有する場としての行動計量学会の役割の意義を強調されていました。学問の再分化と専門化が急速に進む昨今，その役割を今後も維持していく上では行動計量学会のより活発な活動がこれまで以上に期待されるところであると思いますし，私も一会員として努力していかねばならないと考えています。私自身，学会に出る度に自分の不勉強さを嘆かずにはいられないほど頼りない状況ですが，お世話になった行動計量学会に少しでも恩返しができるよう研鑽していく所存ですので，先生方には今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。

肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）を受賞して

日本学術振興会特別研究員（PD）　宮崎慧

この度はこのような栄えある賞を賜り真に光栄に存じます。本学会賞を心の内で目標として参りましたが，本学会における主な活動は『行動計量学』に掲載させて頂いた一遍の論文と何件かの学会発表だけでしたので，まだまだ先のこと，或いは頂けることはないかもしれないと思っておりました。そのため授賞のお知らせを頂いた時は大変感激いたしました。

私は若干気が多い性格なのか，これまで収拾のつかない研究を転々と行って参りました。学部時代はベイズ推定法を用いたマーケティングデータの解析，修士課程では統計的因果推論やテスト理論における等化法，博士課程ではセミパラメトリックベイズ推定法に関する研究を行って参りました。現在は動的モデルを用いたマーケティングデータの解析法の研究を行っております。その度に本学会では懐深く研究内容を受け入れて頂き，幾度となく厳しくも示唆的なコメントを頂戴しております。お陰様でほぼ毎年発表をさせて頂いておりますが，今回奨励賞を頂いたからにはその名に恥じないよう，地に足のついた骨太な研究を行っていかなければと身が引き締まる思いであります。また僭越ながら，自分より若手の学生の皆さんが更に伸び伸びと活躍できるよう，

本学会の発展に寄与できればと思う次第であります。最後になりましたが，この場をお借りして学部および大学院での指導教官として研究内容のみならず研究者の心構えを御教授頂きました繁桝算男先生，研究計画の構築から実際の研究の進め方まで様々なアドバイスをして頂いた繁桝研究室の先輩である星野崇宏先生，また本学会の先輩先生方に深く感謝申し上げます。またこのような名誉ある賞を与えて下さった行動計量学会の皆様方に深謝申し上げます。

出版賞を受賞して

名古屋大学　経済学部　星野崇宏

この度は第一回の杉山明子賞（出版賞）を頂き，身に余る光栄に存じます。

今回の受賞対象となった「調査観察データの統計科学：因果推論・選択バイアス・データ融合」（岩波書店）ですが，これは「非実験研究で得られるデータからの統計的な因果推論」(2 章から 4 章)，「偏った抽出による標本・データを用いることで生じるバイアス(＝選択バイアス)の統計的調整」(5 章および 6 章)，および「複数の情報源から得られたデータを統計的に融合させて推論を行うデータ融合(データフュージョン)」(7 章)の 3 つの話題について，これらを(1) 欠測データとして共通の問題構造を有する，(2) 背景情報(共変量)を積極的に利用することで欠測データの部分を無視したり，予測できる可能性がある，(3) 仮定の少ないセミパラメトリックな推定法を用いるのが良い，という 3 つの観点から整理し，具体例とともに解説したものです。

近年行動科学や社会科学の様々な分野で実証研究が進展していく中で，データは統計学の教科書の通りではなくタチが悪いこと，具体的には母集団から無作為に抽出できなかったり，調査への回答が拒否される（選択バイアスがある），実験ができない状況で正当な評価や判断を行う場合には様々な共変量が影響するためにグループの単純比較は誤った結果を与えうる（因果効果の推定が必要である），個人の行動を規定する変数は多様なため，一つの調査主体が関連する変数すべてを知ることは難しい（複数のデータソースの融合が必要である）といった問題があることが意識され出しました。文章の出来はともあれ，これらの問題意識を統一的に議論した出版物は，国内はもとより海外にも無いと自負しております。

但し，240 ページという一般的な和書の制限に収めるためには数式展開の一部やいくつもかの重要なトピックを割愛せざるを得ませんでした。また，具体例は教育学・医学・経済学・マーケティングとなるべく多様な分野から取り上げたつもりですが，最近この分野の手法の利用が増えている政治学や社会学，心理学の例を十分盛り込むことができませんでした。R のコードももう少し増やせればよかったですし，SAS や SPSS で解析する際の注意なども書くべきでした。このように今から振り返ると反省点ばかり思い浮かびますが，それでも今回の学会賞を頂けましたのも，この種の専門書にしては予想外に多くの方に手に取って頂き，また引用して頂けたためと思います。

本著作を執筆するに当たっては多くの方々のご助言とご指摘を頂きました。行動計量学会では大学院生時代から学会発表において示唆に富むアドバイスを頂いたことで，様々な知識を得ただけではなく視野が広がりました。会員の皆様には心より感謝申し上げます。

現在，今回の著作をさらに発展させ，より幅広い分野の応用研究者にリサーチデザインの策定と解析への示唆を与え，かつすぐに使えるプログラムも盛り込んだ英文著書を執筆中です。今回の受賞を励みにし，またこれまで頂いた様々なご意見を踏まえ，微力ながらも行動計量学のさらなる発展に寄与できるような研究教育活動，そして行動計量学の応用実践を行えればと考えております。

日本行動計量学会出版賞（杉山明子賞）を受賞して

柳井晴夫

このたびは，日本行動計量学会 39 回大会総会（於：岡山理科大学）にて第 1 回出版賞（杉山明子賞）を，授与させていただきました。有難くお受けさせていただきました。

受賞者は，柳井の他に，竹内啓（東大経済学部名誉教授），高根芳雄（カナダマッギル大学教授）の両氏で，受賞対象となった出版物は以下の通りです。3 名を代表して柳井が本稿を執筆させていただきました。出版に関する情報は以下の通りです。

Statistics for Social and Behavioral Sciences（社会科学行動科学のための統計学）

Haruo Yanai, Kei Takeuchi , Yoshio Takane

Projection Matrices, Generalized Inverse Matrices, and Singular Value Decomposition,

Publisher: Springer: New York, Dordrecht Heidelberg London（頁数；234 頁）

ISB:978－1－4419－9886－6

発行日・2011 年 4 月下旬（Library Control Number 2011925633—2011 という表記あり）

本書は，Preface の最後の部分に記しましたように，下記の出版物；

柳井晴夫・竹内啓（1983）射影行列・一般逆行列・特異値分解　東大出版会

がもとになっているが，上記の本の出版を担当した審査者の強い意見が，「上記 1983 年の出版物の単なる翻訳は認めがたい。1984 年以降の主題（射影行列，一般逆行列，特異値分解）の関連研究の発展も含めた Renewal なものにする必要がある」という点であった。したがって，今回の英文出版物で取り扱われた内容は，柳井・竹内(1983)とほぼ同一であるが，1984 年以降に発表したわれわれの研究成果，および眼についた関連研究の主要な話題を，各章の Exercises に盛り込み，それらの解答も巻末に詳述した。

頁数の制約もあり，出版物の内容についての詳細は省略するが，タイトルにある，射影行列，一般逆行列，特異値分解は，多変量（特に多変量データ）解析の理論的支柱となるもので日本行動計量学会の会員に関心をお持ちいただけるものであると確信している。上記の著 には，竹内啓先生との共著「多変量解析の基礎－線形空間への射影による方法；東洋経済新報，1972」および「The Foundations of Multivariate Analysis: A unified Approach by means of Projection onto Linear Subspaces; Wiley Eastern New Delhi, 1982」の発展，および 1990 年以降に発表した高根芳雄氏との斜交射影（oblique projector）等の関連論文等（および，C.R. Rao との共同研究も含め）の成果も反映させることができた。いずれにしても今回の著は，私自身のこれまでの研究成果のひとつのまとめといえよう。

以上の経過をたどっての今回の出版物は，柳井・竹内（1983）の英文出版を以前から強く勧めていただいた，竹内啓先生，および高根芳雄氏の絶え間ない激励によって完成したもので，今回の 3 名による出版賞の受賞はまさに正鵠をえたものといえよう。今後，多くの会員が，Springer ,Wiley などの外国出版社からご自分の研究成果を出版されることを願ってやまない。（日本行動計量学会理事，元理事長）

平成22年度決算

収入	予算	決算	増減	備考
前年度繰越金	8,435,847	8,435,847	0	
前年度事業未払繰越金	1,000,000	1,000,000	0	和文誌37-1制作費
学会費	5,000,000	5,343,000	343,000	滞納分支払いを含む
学会費(次年度以降前受け分)	2,500,000	2,325,000	△ 175,000	前受け分
学会誌売上金	250,000	150,000	△ 100,000	南窓社、広島大学生協
広告費	240,000	390,000	150,000	数理システム、北大路書房、朝倉書店
預金利子	2,000	1,588	△ 412	
著作権料	250,000	456,845	206,845	NII-ELS、Medical Online、出版者著作権管理機構
雑収入	0	200,000	200,000	第36回大会実行委員会より寄付
各委員会からの返還金等	0	149,413	149,413	欧文誌、和文誌、運営委員会、研究部会1件
学術定期刊行物補助金	900,000	900,083	83	科研費(特別会計から組み入れ)
学会活動積立金取り崩し	0	0	0	
事務局整備積立金取り崩し	0	0	0	
会員名簿発行積立金取り崩し	0	0	0	
計	18,577,847円	19,351,776円	773,929円	

支出	予算	決算	増減	備考
前年度事業未払分	1,000,000	1,399,898	399,898	和文誌37-1制作費
学会誌制作費和文誌37-2	2,000,000	889,822	△ 1,110,178	
学会誌制作費和文誌38-1	2,000,000	0	△ 2,000,000	23年度に繰越
学会誌制作費欧文誌37-2	1,200,000	1,002,933	△ 197,067	内900,083円は科研費
学会誌制作費欧文誌38-1	1,200,000	1,313,550	113,550	
シンポジウム費用	300,000	0	△ 300,000	
各委員会活動費	450,000	450,000	0	和文、欧文、運営(各15万円)
研究部会費	200,000	200,000	0	研究部会4件(各5万円)
学会事務委託費	4,000,000	1,399,019	△ 2,600,981	
印刷費等	50,000	0	△ 50,000	
会報発行費	400,000	706,556	306,556	会報4号分
通信費	10,000	410	△ 9,590	
インターネット利用料	50,000	56,064	6,064	会員向けメーリングリスト、ドメイン名
消耗品費	100,000	0	△ 100,000	
会合費	250,000	146,780	△ 103,220	理事会、監査作業
雑費	100,000	17,850	△ 82,150	振込手数料
インターネットバンキング利用料	20,000	12,600	△ 7,400	学会名義の銀行口座
学会誌保管料等	200,000	94,500	△ 105,500	
J-stageデータ作成	550,000	149,205	△ 400,795	
大会準備金	300,000	300,000	0	第39回大会分
予備費	2,400,000	10,000	△ 2,390,000	春の合宿セミナー返金(立替)
各種分担金	80,000	80,000	0	横幹連5万円、統計関連学会連合3万円
会員名簿作成	0	0	0	
学会活動積立金	500,000	500,000	0	50万円積立
事務局整備積立金	500,000	500,000	0	50万円積立
学会賞基金積立金	300,000	300,000	0	21年度は積立なしだったので、15万円×2年度分
会員名簿作成費積立金	400,000	400,000	0	名簿作成費を積立
カード手数料	2,500	1,800	△ 700	会費納入手数料
その他	15,347	300	△ 15,047	印鑑証明書(ドメイン名取得)
当年度事業未払繰越金	0	2,500,000	2,500,000	和文誌38-1、和文誌電子化
次年度への繰越金		6,920,489	6,920,489	
計	18,577,847円	19,351,776円	773,929円	

特別会計(別口座)	期首	支出	収入	期末	備考
学会賞基金(林知己夫賞)	2,761,267円	150,630円	300,703円	2,911,340円	功績賞10万円1件、優秀賞5万円1件、30万円を一般会計より積立
学会賞基金(肥田野・水野賞)	492,663円	30,630円	1,000,293円	1,462,326円	奨励賞3万円1件、杉山明子先生寄付金
学会活動積立金	3,806,814円	0円	500,992円	4,307,806円	50万円を一般会計より積立
会員名簿作成費積立金	0円	0円	400,030円	400,030円	40万円を一般会計より積立
事務局整備積立金	1,153,439円	0円	500,322円	1,653,761円	50万円を一般会計より積立
22年度学術定期刊行物補助金	0円	900,083円	900,083円	0円	90万円交付、一般会計に組み入れ

日本行動計量学会

自 平成22年4月1日

至 平成23年3月31日

会計監査の結果、事実のとおりに
相違ないことを証します。

平成23年 6 月 14日

渡部 洋

柳原良造

平成23年度予算

日本行動計量学会

自 平成23年4月1日

至 平成24年3月31日

収入	平成23年度予算	平成22年度実績	増減	備考
前年度繰越金	6,920,489	8,435,847	△ 1,515,358	
前年度事業未払繰越金	2,500,000	1,000,000	1,500,000	和文誌38-1、和文誌電子化
学会費	5,000,000	5,343,000	△ 343,000	滞納分支払いを含む
学会費（次年度以降前受け分）	2,500,000	2,325,000	175,000	前受け分
学会誌売上金	250,000	150,000	100,000	
広告費	240,000	390,000	△ 150,000	
預金利子	2,000	1,588	412	
著作権料	250,000	456,845	△ 206,845	
雑収入	0	200,000	△ 200,000	
各委員会からの返還金等	0	149,413	△ 149,413	
学術定期刊行物補助金	800,000	900,083	△ 100,083	科研費交付内定（特別会計から組み入れ）
学会活動積立金取り崩し	0	0	0	
事務局整備積立金取り崩し	0	0	0	
会員名簿発行積立金取り崩し	0	0	0	
計	18,462,489円	19,351,776円	△ 889,287円	

支出	平成23年度予算	平成22年度実績	増減	備考
前年度事業未払分	2,500,000	1,399,898	1,100,102	和文誌38-1、和文誌電子化
学会誌制作費和文誌38-2	2,000,000	889,822	1,110,178	
学会誌制作費和文誌39-1	2,000,000	0	2,000,000	
学会誌制作費欧文誌38-2	1,200,000	1,002,933	197,067	
学会誌制作費欧文誌39-1	1,200,000	1,313,550	△ 113,550	
シンポジウム費用	300,000	0	300,000	
各委員会活動費	450,000	450,000	0	和文、欧文、運営（各15万円）
研究部会費	150,000	200,000	△ 50,000	研究部会3件（各5万円）
学会事務委託費	2,000,000	1,399,019	600,981	理事選挙費用を含む
印刷費等	50,000	0	50,000	
会報発行費	800,000	706,556	93,444	会報4号分
通信費	10,000	410	9,590	
インターネット利用料	60,000	56,064	3,936	会員向けメーリングリスト、ドメイン名
消耗品費	100,000	0	100,000	
会合費	250,000	146,780	103,220	
雑費	100,000	17,850	82,150	
インターネットバンキング利用料	20,000	12,600	7,400	学会名義の銀行口座
学会誌保管料等	200,000	94,500	105,500	
J-stageデータ作成	550,000	149,205	400,795	
大会準備金	300,000	300,000	0	第40回大会分
予備費	2,550,000	10,000	2,540,000	東日本大震災対応費用を含む
各種分担金	80,000	80,000	0	横幹連5万円、統計関連学会連合3万円
会員名簿作成	0	0	0	
学会活動積立金	500,000	500,000	0	50万円積立
事務局整備積立金	500,000	500,000	0	50万円積立
学会賞基金積立金	150,000	300,000	△ 150,000	15万円積立
会員名簿作成費積立金	400,000	400,000	0	名簿作成費を積立
カード手数料	2,500	1,800	700	
その他	39,989	300	39,689	
当年度事業未払繰越金	0	2,500,000	△ 2,500,000	
次年度への繰越金		6,920,489	△ 6,920,489	
計	18,462,489円	19,351,776円	△ 889,287円	

特別会計（別口座）	期首	支出	収入	期末	備考
学会賞基金（林知己夫賞）	2,911,340円	150,000円	150,000円	2,911,340円	功績賞10万円1名、優秀賞5万円1件、15万円を一般会計より積立
学会賞基金（肥田野・水野賞）	462,326円	60,000円	0円	402,326円	奨励賞3万円2件
学会賞基金（杉山賞）	1,000,000円	100,000円	0円	900,000円	出版賞5万円2件
学会活動積立金	4,307,806円	0円	500,000円	4,807,806円	50万円を一般会計より積立
会員名簿作成費積立金	400,030円	0円	400,000円	800,030円	40万円を一般会計より積立
事務局整備積立金	1,653,761円	0円	500,000円	2,153,761円	50万円を一般会計より積立
23年度学術定期刊行物補助金	0円	800,000円	800,000円	0円	80万円交付内定

役員（理事・監事）選挙実施のお知らせ

選挙管理委員会

会則第 12 条の規定に基づき，役員（理事および監事）の選挙を行います。選出される役員の任期は 2012 年 4 月 1 日から 3 年間です。今後の学会運営を担う会員を選出する重要な選挙です。有権者の方は確実にご投票下さるようにお願い致します。

投票締切日：
2012 年 1 月 13 日（金），当日消印有効
選挙人および被選挙人（有権者）：
2011 年 4 月 1 日現在正会員またはシニア会員で，2011 年 11 月 21 日現在ひき続き正会員またはシニア会員であるもの（2011 年 4 月 2 日以降に入会した正会員と，4 月 2 日以降に準会員から正会員への種別変更のあった会員を除く）

実施詳細は別紙による実施要領を参照下さい。有権者には選挙関係の下記の書類が各 1 点同封されていますのでご確認下さい。

・役員選挙実施要領
・選挙人および被選挙人名簿
・投票用紙
・投票用紙封入用小封筒
・返信用封筒

なお，書類の不備，封入漏れなどに気付かれた場合は，選挙管理委員会へ至急ご連絡をお願い致します。

選挙管理委員会：
吉野諒三(委員長)　松本渉　尾碕幸謙

（連絡先）
〒190-8562　東京都立川市緑町 10-3
統計数理研究所 吉野研究室内
日本行動計量学会 選挙管理委員会
Phone：　050-5533-8558
E-mail:　yoshino@ism.ac.jp

運営委員会より

第 39 回大会チュートリアルセミナーの報告

日本行動計量学会第 39 回大会において，チュートリアルセミナーが下記の要領で開催されました。今回は，ちょうど，10 日と 11 日に日本テスト学会第 9 回大会が岡山大学で開かれることから，日本テスト学会との共催とし，岡山大学において開催することとしました。

日時：2011 年 9 月 11 日（日）13:00～18:30
会場：岡山大学教育学部
テーマと講師：
①「シンボリックデータ解析」水田正弘（北海道大学）
参加人数：39 名
②「学習評価の新潮流」植野真臣（電気通信大学）・荘島宏二郎（大学入試センター）
参加人数：59 名

チュートリアル①では，Diday 教授が提唱し発展してきたシンボリックデータ解析(SDA)について，その歴史的背景を含めた基本的な考え方に始まり，主成分分析，多次元尺度構成法，判別分析，クラスター分析において従来の用法とは異なる SDA としての解析方法に至るまでの広い範囲についての内容を含んだ講演でした。まだまだ新しい概念というイメージのある SDA を，具体的事例を用いながらわかりやすく説明していただきました。

チュートリアル②では，お二人の先生にご担当いただきました。このお二人は，日本行動計量学会発行の新シリーズ「行動計量の科学」の第 4 巻の著者であり，今回，その書籍を教科書としてセミナーを行ってもらいました。まず，植野先生からは，知識とは何かという話に始まり，学習理論や評価理論の基本的な概念やその推移の概要の説明に続いて，e テスティングについてその概略や解析システムの説明があり，さらに e ポートフォリオシステムに関するご自身の取り組みなどを事例を用いて説明していただきました。続いて，荘島先生からは，古典的テスト理論，項目反応理論，潜在ランク理論というテーマで講演がありました。テスト理論に関する基本的な用語や概念の説明，項目反応理論の概要や使用

上の注意点等の説明，潜在ランク理論の解説およびご自身の開発された解析ソフトウェア Exametrika の紹介がありました。長時間のセミナーとなりましたが，講師の先生方の丁寧な解説を聞くことができました。

今回のチュートリアルでの，水田先生，植野先生，荘島先生ならびに熱心な参加者の皆様に感謝申し上げます。

日本行動計量学会第 39 回大会実行委員会
チュートリアルセミナー担当
平井安久（岡山大学・教育学部）

日本行動計量学会第 14 回春の合宿セミナー

会場：大阪商業大学
（http://ouc.daishodai.ac.jp/future/）
日時：
2012 年 3 月 17 日（土）12:30 - 18 日（日）17:00
共催：大阪商業大学 JGSS 研究センター
オーガナイザー：
岡太彬訓（多摩大学）・山口和範（立教大学）

参加申込
http://www2.rikkyo.ac.jp/web/bsj2011s/
より申し込んで下さるようお願いいたします。参加申込は，12 月 12 日開始です。参加申込 7 日以内に下記口座へ振込んで下さるようお願いいたします。領収書は，セミナー当日受付でお渡しいたします。

参加費払込先
埼玉りそな銀行　朝霞支店，普通口座
口座名「行動計量合宿セミナー」，口座番号 4326416

参加費

	事前払い	当日払い
準会員	2,500 円	3,000 円
会員（除準会員）	5,000 円	6,000 円
非会員	10,000 円	11,000 円
非会員（学生）	2,500 円	3,000 円

宿泊は各自でご予約下さるようお願いいたします。
なお，コミュニティーホテルから大阪商業大学まで徒歩 5 分です（近鉄河内小阪駅より徒歩 5 分）。
http://www.u-community.co.jp/

セミナーのコース
岩井紀子（大阪商業大学）
East Asian Social Survey からみた国際比較調査の困難と課題
Wolfgang Gaul（Karlsruhe Institute of Technology）
Where Data Analysis Meets Graph Theory
佐藤忠彦（筑波大学）
マーケティングにおけるベイジアンモデリングの実際
横山暁（帝京大学）
R 入門から多変量解析まで
中山厚穂（首都大学東京）
Excel ソルバーによる多変量解析
吉野諒三（統計数理研究所）・林文（東洋英和女学院大学）
社会調査研究の宝庫-- 国際比較
問い合わせ先
岡太彬訓（okada@rikkyo.ac.jp）・山口和範（kyamagu@rikkyo.ac.jp）

第 96 回行動計量シンポジウム

・テ ー マ：項目反応理論の基礎と応用
・開催場所：岡山理科大学
・日　　程：2012 年 3 月 17 日（土）13:00～18:20（予定）
・U R L：http://mo161.soci.ous.ac.jp/bsj_okayama/96/
・講演者・講演タイトル：
大澤公一（山口大学アドミッションセンター）
・項目反応理論の概要
・IRTPRO の使い方
加藤健太郎（教育テスト研究センター／ベネッセコーポレーション）
・R を用いた項目反応理論の実行
・語彙検定の評価における項目反応理論の活用
川端一光（国際交流基金）
・実務に生かす項目反応理論

日本行動計量学会第 40 回大会のお知らせ

次年度の大会（第 40 回大会）は次の通り開催されます。

日本行動計量学会第 40 回大会
大　会　会　場 : 新潟県立大学
開　催　期　間:2012 年 9 月 13 日(木)～16 日(日)
大会実行委員長 : 猪口　孝
http://www.unii.ac.jp/bsj2012/

次年度大会開催校からのご挨拶とご案内挨拶

このたび，日本行動計量学会第 40 回大会を 2012 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）に新潟県立大学で開催させていただくことになりました。新潟での開催は，第 33 回大会（2005 年，植野真臣大会実行委員長，長岡技術科学大学）に続き，2 回目の開催となります。

新潟県立大学は 2009 年に開学した新しい大学です。今年で開学 3 年目を迎えました。現在の学生数が約 750 名，教員数が約 80 名の小さな大学です。「国際性の涵養」,「地域性の重視」,「人間性の涵養」，を大学の基本理念としています。校舎は，前身の県立新潟女子短期大学のキャンパスを土台にしていますが，2009 年 12 月には 1 号館 B（増築棟）が竣工しました。第 40 回大会のセッションは主にこの増築棟で行います。特別講演は，増築棟の隣に 2012 年 5 月完成予定の学生食堂を使用する予定です。

新潟駅から本学までの交通アクセスは，JR とバスを利用する方法があります。JR 新潟駅から白新線に乗り JR 大形駅下車（所要時間約 12 分），JR 大形駅から本学キャンパスまで徒歩約 15 分です。

バスを利用する場合は，新潟駅から徒歩約 5 分の「明石 1 丁目」（新潟中央郵便局前）バス停から，［一日市・大江山線］か［新崎・競馬場線］か［新発田線］のバスに乗り，［県立大学前］バス停下車（所要時間約 25 分），バス停から本学キャンパスまでは徒歩約 5 分です。タクシーならば，新潟駅からおよそ 2,000 円から 2,500 円です。

第 40 回大会も，例年通り，特別セッション企画の募集，それに引き続き，一般研究発表の募集を行う予定です。多くのご発表，たくさんのご参加を，実行委員一同，心よりお待ちしております。

熱のこもった議論の合間には，新潟市近辺では，朱鷺メッセ，新潟市歴史博物館，北方文化博物館（豪農の館），城下町新発田・村上，温泉，日本海の海の幸，米，新潟の地酒，フルーツなどなど，新潟の名所・名産もしっかり味わっていただけたらと思います。

本大会が有意義な会となるよう実行委員一同最善を尽し，みなさまをお待ちしておりますので，どうぞよろしくお願い申し上げます。

新潟県立大学学長
猪口　孝（第 40 回大会実行委員長）

関連学会等カレンダー

＜学協会大会・定例シンポジウム等＞
（開催日順に掲載）

☆第 31 日本看護科学学会学術集会
開催日：2011 年 12 月 2 日（金）・3 日（土）
開催場所：高知県立県民文化ホール，高知市文化プラザかるぽーと，ホテル日航高知旭ロイヤル
http://jans2011.com/index.html

☆日本教育工学会
研究会「地域連携と教育・学習環境／一般」
開催日：2011 年 12 月 17 日（土）
開催場所：〒761-0396 香川県高松市林町 2217-20
香川大学林町キャンパス講義棟 3 階 3303･3304 教室
開催担当：林 敏浩（香川大学 総合情報センター）
hayashi@eng.kagawa-u.ac.jp

☆西里静彦先生(カナダ・トロント大学名誉教授)ご講演「探索的研究と測度の選択：求めようとしているのは何か？」

申込先(問い合わせ先)：大学入試センター試験評価解析研究部門，shien@rd.dnc.ac.jp，03 5478 1276
申込み締切り：12 月 13 日(火)
開催日：2011 年 12 月 20 日(火)　10:30～12:00
開催場所：(独) 大学入試センター 1F 大会議室
東京都目黒区駒場 2-19-23
京王井の頭線 駒場東大前駅 西口より徒歩 5 分

☆医学統計学研究センター主催平成 23 年度第 3 回セミナー「ベイジアン統計解析の実際 —WinBUGS を利用してー」

講師：Taeko Becque，丹後俊郎（医学統計学研究センター）
日時：2012 年 1 月 20 日（金）PM1:30～PM4:45
開催場所：汐留イタリア街東京茶業会館 F 東茶協ホール
http://medstat.jp/pdf/seminar3r.pdf

☆第 22 回日本疫学会学術総会

開催日：2012 年 1 月 26 日（木）～28 日（土）
開催場所：学術総合センター・一橋記念講堂
http://jeaweb.jp/soukai/no22/index.html

☆日本教育工学会 2011 年度冬の合宿研究会「国際学会での発表スキルを磨く ー伝わる英語発表ー」

開催日時：2012 年 2 月 18 日（土）13:30～19 日（日）12:00
開催場所：大学コンソーシアムやまがた
ゆうキャンパス・ステーション
（山形市香澄町 1-3-15 山形むらきさわビル 1 階）
http://www.jset.gr.jp/

☆日本教育工学会
研究会「情報モラル教育の実践／一般」

開催日：2012 年 3 月 3 日（土）
開催場所：山口大学
開催担当：阿濱 茂樹（山口大学 教育学部）
ahama@yamaguchi-u.ac.jp
申込締切：2012 年 1 月 8 日（日）
原稿提出：2012 年 1 月 22 日（日）
http://www.jset.gr.jp/

☆第 23 回日本発達心理学会

開催日：2012 年 3 月 9 日（金）～11 日（日）
開催場所：名古屋国際会議場
http://www.wdc-jp.biz/jsdp/conf2012/index.html

☆社会言語科学会第 29 回研究大会

開催日：2012 年 3 月 10 日（土）・11 日（日）
開催場所：桜美林大学（町田キャンパス）
http://www.jass.ne.jp/activities_conference.html

☆第 53 回数理社会学会大会

開催日：2012 年 3 月 14 日（水）・15 日（木）
開催場所：鹿児島大学
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jams/

☆AAPOR 66th Annual Conference
（アメリカ世論調査学会第 67 回年次大会）

開催日：2012 年 5 月 17 日（木）～20 日（日）
開催場所：JW Marriott Orlando Grande Lakes Orlando, Florida
http://www.aapor.org/

☆第 26 回国際計量生物学会議 IBC2012

開催日：2012 年 8 月 26 日(日)～31 日(金)
開催場所：兵庫県神戸コンベンションセンター
http://secretariat.ne.jp/ibc2012/index.html

本会議は 1984 年に林知己夫先生を組織委員長として，アジアで初めて第 12 回国際計量生物学会議が東京で開催されて以来，2 回目の日本での開催となります。

現在，一般演題を公募中(2012 年 1 月 15 日締め切り)です。皆様のご参加をお待ちしております。

第 26 回国際計量生物学会議組織委員長　丹後俊郎

☆2012 年度統計関連学会連合大会

開催日：2012 年 9 月 9 日（日）～12 日（水）
開催場所:かでる 27（チュートリアルと市民講演会），北海道大学（札幌キャンパス）

☆ The 6th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems, and the 13th International Symposium on Advanced Intelligent Systems (SCIS-ISIS2012)

主催：日本知能情報ファジィ学会
（日本行動計量学会協賛）
開催日：2012 年 11 月 20 日（火）～24 日（土）
http://scis2012.j-soft.org/

公募・求人情報

☆北海道大学　教員公募

公募人員　大学院情報科学研究科　コンピュータサイエンス専攻　数理計算科学講座　知能情報学研究室　教授１名
専門分野　知能情報学。具体的な研究分野としては，人間とコンピュータに限らずネットワークや社会あるいは脳とのインタラクションを含む広い意味でのヒューマン・コンピュータ・インタラクションに関する研究，論理体系や記号論的モデルによる知識の体系化や推論分析に関する研究，メディア・インタラクションと知能情報処理に関する研究，安心・安全な社会を実現するための知能情報学的研究など。
応募資格　博士の学位を有し，専門分野に関する世界的水準の研究業績を有し，教育および研究に熱意のある方。
応募締切　平成 24 年 1 月 27 日（金）必着
着任時期　平成 24 年 7 月 1 日以降のできるだけ早い時期
問合先　大学院情報科学研究科　工藤 峰一
E－mail mine@main.ist.hokudai.ac.jp
（Tel.011-706-6852）
詳細　情報科学研究科のウェブページ
http://www.ist.hokudai.ac.jp/information/

学会刊行物のお知らせ

日本行動計量学会では，シリーズ「行動計量の科学」（柳井晴夫・岡太彬訓・繁桝算男・吉野諒三・森本栄一編，全 10 巻）の刊行を進めております。

（既刊）
柳井晴夫編（飽戸弘・松原望・池田央・高倉節子・宮原英夫・丸山久美子・猪口孝・木下冨雄分担執筆）『行動計量学への招待』（シリーズ〈行動計量の科学〉 1）朝倉書店.
岡太彬訓・守口剛著『マーケティングのデータ分析』（シリーズ〈行動計量の科学〉 2）朝倉書店.
植野真臣・荘島宏二郎 著『学習評価の新潮流』（シリーズ〈行動計量の科学〉 4）朝倉書店.
吉野諒三・林文・山岡和枝 著『国際比較データの解析』（シリーズ〈行動計量の科学〉 5）朝倉書店.
市川雅教 著『因子分析』（シリーズ〈行動計量の科学〉 7）朝倉書店.
村木英治 著『項目反応理論』（シリーズ〈行動計量の科学〉 8）朝倉書店.
足立浩平・村上 隆 著『非計量多変量データ解析－主成分分析の非計量化と多重対応分析－』（シリーズ〈行動計量の科学〉 9）朝倉書店.

（以下続刊）
『医療サービスの計量分析』（シリーズ〈行動計量の科学〉 3）久保武士・清木　康
『意思決定の処方』（シリーズ〈行動計量の科学〉6）竹村和久・藤井　聡
『統一的カテゴリカルデータ解析』（シリーズ〈行動計量の科学〉 １０）　星野崇宏

会員の著書等

（発行年月の新しい順）

南風原朝和著『臨床心理学をまなぶ 7　量的研究法』東京大学出版会，2011 年 11 月.

高橋伸夫編著『よくわかる経営管理』ミネルヴァ書房，2011 年 11 月.

朝野熙彦編著『アンケート調査入門ー失敗しない顧客情報の読み方・まとめ方』東京図書，2011 年 10 月.

松原望・美添泰人・岩崎学・金明哲・竹村和久・林文・山岡和枝編『統計応用の百科事典』丸善出版，2011 年 10 月.

鄭躍軍著・金明哲編著『社会調査データ解析』（R で学ぶデータサイエンス 17）共立出版，2011 年 9 月.

服部環著『心理・教育のための R によるデータ解析』福村出版　2011 年 3 月.

中村永友・山田智哉・金明哲著『Excel で学ぶ統計・データ解析入門』丸善，2011 年 1 月.

学会誌論文投稿先

学会大会で発表された研究などをできるだけ論文として投稿してください。お待ちしております。

和文誌：「行動計量学」

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部心理学教室　竹村和久
E-mail: koudoukeiryougaku@gmail.com

欧文誌：「Behaviormetrika」

〒565-0871　大阪府吹田市山田丘 1―2
大阪大学人間科学研究科 足立浩平
E-mail: adachi@hus.osaka-u.ac.jp

ご連絡

日本行動計量学会会員数（2011 年 11 月 21 日現在）

正会員：	828 名（海外 4 含む）
準会員：	54 名
名誉会員：	10 名
賛助会員：	23 社
寄贈会員：	9 名
シニア会員：	18 名

（注）長期滞納のため，10/31 付けで 93 名の方の退会処理をおこなっています。

入会手続き

学会では新入会員を広く募っています。詳しくは，下記までお問い合わせください。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19
(株)国際文献印刷社内
日本行動計量学会係(担当：岸)
bsj-post@bunken.co.jp
TEL:03-5389-6209　FAX:03-3368-2822

学会ホームページのＵＲＬ変更について

日本行動計量学会　広報委員会

本会のホームページ
http://wwwsoc.nii.ac.jp/bsj/
は，国立情報学研究所の「学協会情報発信サービス」を利用して公開されてきましたが，この「学協会情報発信サービス」が来年の３月をもって終了することになりました。

そこで，本会では，独自のドメイン名を取得し，そちらで運用する準備を進めております。新しいＵＲＬは，
http://www.bsj.gr.jp
です。１２月または新年より，上記ＵＲＬで，学会のＷｅｂを見ることができるようになります。閲覧可能となりましたら，まず，メーリングリストでお知らせし，正式の連絡は，次号（2012 年 3 月 1 日発行）の会報に掲載します。

新ＵＲＬで運用が始まった後も，しばらくは，古いＵＲＬから自動で新しいＵＲＬへ切り替えてくれるようですが，ブックマークなどされている場合は，早めに変更されるようお知らせ申し上げます。

以上，ご連絡申し上げます。

会員向けメーリングリストの登録・変更・削除について

本会では，会員向けメーリングリストに登録されたアドレスにメールニュースを配信しています。こちらへメールアドレスを新規登録，変更，削除（メールニュースの配信停止）される場合は，ご自身で，「会員向けメーリングリスト：登録・サービスの詳細」のページ

http://wwwsoc.nii.ac.jp/bsj/member/ml.html

に接続して，そこの指示にしたがって，作業を行ってください。なお，会員であることを確認するために会員番号が必要ですので，学会からの送付物の宛名シールなどを用意してください。

よろしくお願いします。

会員専用ページへのアクセス

学会 Web ページの「会員のみなさまへ」の会報，会員向けメーリングリストの 2 つのページが会員専用となっています。これらのページにアクセスする際には，以下のユーザー名とパスワードの入力が必要となります。

ユーザー名：bsj
パスワード：1973

会報原稿募集

広報委員会では，会員の方が出版された本や，会員に関係があると思われるシンポジウム，セミナー，学協会大会，公募・求人情報などについて，会員の皆様から原稿を募集しております。過去の会報の形式を参考にして原稿をおまとめいただき，下記の送付先までお送り下さい。

なお，編集の都合上，発行月（3，6，9，12）の前々月の末日まで（次号 132 号の場合には 1 月末日）にお寄せいただければ，直近号に掲載することが可能です。それ以降に届いたものにつきましては，内容を判断した上で，次号に回させていただきますのでよろしくお願い申しあげます。

会報原稿送付先

〒569-1095 大阪府高槻市霊仙寺町 2－1－1
関西大学総合情報学部　松本 渉
matsumoto@res.kutc.kansai-u.ac.jp
TEL: 072-690-2422

編集後記

今号は，12 月号として恒例の構成を取らせて頂きました。第 39 回大会の森実行委員長の巻頭言に始まり，学会賞授賞関連の記事として，村上隆選考委員長および各賞を受賞された先生方のご挨拶のお言葉を掲載いたしました。皆様，お忙しいところ快く応じていただき，ありがとうございました。

ところで，今号の記事の中にもありますように，今年度は役員改選の選挙があります。過分にも選挙管理委員のお役目を，前回の役員選挙（2008 年度実施）に引き続き拝命いたしましたので，少しばかり関連する話題を書かせて頂きます。

公表されている資料を見直しますと，前回の選挙では，有権者 864 人に対し，返送総数 114 通（無効 7 通含）だったようです。投票率にして約 13%です。同列に論じる是非はともかく，国政選挙などと比べるときわめて低い数字です。

本学会は，調査の回収率や選挙行動に関心をお持ちの方が多くおられることを考えますと，投票率はもっと高くなってもよいように思います。年末年始をまたぐ時期ではありますが，有権者の皆様におかれましては，投票用紙をご送付されるのをお忘れなきようお願いいたします。

（まつもと　わたる，松本渉）

題字：林知己夫
広報委員長：森裕一
会報作成担当：松本渉・吉村宰・星野崇宏・城川美佳・菅野剛・田中ゆかり・中山厚穂・山岸侯彦・山田剛史
相談役：前田忠彦